

(様式 8)

平成30年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進地域】

番号	24	都道府県市名	三重県
----	----	--------	-----

1 推進地域における学力に関する現状

義務教育段階では、全国学力・学習状況調査において、中学校国語A・B、数学Bの平均正答率が全国平均を下回っている状況が続いている。さらに、中学生の家庭学習の習慣（学習時間、復習等）についても、平日、休日のどちらも全国平均を大きく下回っている状況がある。これらのことから、特定の高等学校では、基礎学力が定着していない、家庭学習の習慣がついていない生徒が多く入学しており、高等学校入学時から中学校の学習範囲の学び直しを組織的系統的に取り組む必要が出てきている。

高等学校の授業では、現行の学習指導要領に基づくグループで話し合う活動や、調べたことや考えたことを発表し合う活動等を重視する「言語活動」などの取組は進みつつあるものの、依然として知識伝達型の授業も見られ、学力の三要素を踏まえた指導が十分に行われておらず、全県的な取組を展開していくことが喫緊の課題となっている。

2 研究課題（平成30年度の重点課題）

本実践研究の研究課題を「オール三重で切り拓く、みえの基礎学力定着促進プロジェクト」とし、このうち推進地域では「全ての県立高等学校における、基礎学力の確実な定着に向けたPDCAサイクルの構築」に取り組んだ。具体的には以下の3点について研究を進めた。

- (1) 学力定着に課題を抱える複数の高等学校の、国語・数学・外国語（英語）の教員を集めた教科別グループ（「みえ基礎学力UPコンソーシアム」）を組織し、各校における学習・指導方法の実践、改善に取り組む。
- (2) カリキュラム・マネジメントを促進する「学校マネジメントシステム」を研究・開発し、全ての県立高等学校で基礎学力定着に向けたPDCAサイクルを構築する。
- (3) 学力向上推進協議会からの研究・開発全般に対する指導・助言を踏まえ、県内高等学校へ研究成果を普及する。

3 研究の内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

① みえ基礎学力UPコンソーシアム

推進校、協力校、サポート校を以下のように位置付け、学力定着に課題を抱える複数の高等学校の国語・数学・外国語（英語）の教員を集めた教科別グループ（「みえ基礎学力UPコンソーシアム」）を組織した。また、学力向上推進協議会にも進捗状況を定期的に報告し、指導・助言を受けながら実施した。

推進校：県立桑名北高等学校（国語1名、数学1名、英語1名）

協力校：県立菟野高等学校（国語1名、数学1名、英語2名）

※ 国事業「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の指定校

サポート校：県立四日市四郷高等学校（数学2名、英語2名）

県立松阪商業高等学校（英語 1 名）
県立伊勢工業高等学校約（国語 1 名）
県立鳥羽高等学校（数学 1 名）

② 学力向上推進協議会

専門的な見地から指導・助言を受けるため、学力向上推進協議会を設置し、以下の方々に依頼して実施した。

- ・ カリキュラム・マネジメントへの指導・助言
赤沢 早人（奈良教育大学次世代教員養成センター 教授）
- ・ 事業全体の検証・評価
岩崎 恭典（四日市大学 学長）
- ・ 授業改善への指導・助言
鈴木 健生（ユマニテク短期大学 副学長）
- ・ 基礎学力の定着へ向けた実践事例の紹介
徳岡 卓也（株式会社ベネッセコーポレーション名古屋支社 支社長）
- ・ 事業全体の進捗管理
徳田 嘉美（県教育委員会事務局高校教育課 課長）
- ・ 各取組への指導・助言
一尾 哲也（県教育委員会事務局高校教育課高校教育班 指導主事）
河合 貞志（県教育委員会事務局高校教育課高校教育班 指導主事）

(2) 推進校への具体的な支援・指導

県教育委員会は、推進校に対し、以下の取組の支援を行った。

① 学力向上推進協議会の開催

学力向上推進協議会を設置し、本事業の研究・開発全般について専門的な見地から指導・助言を受けた。

② 指導主事による学校訪問

研究の進捗を図るため、以下のとおり指導主事による学校訪問を定期的実施するとともに、ベンチマーキング等の外部機関との連携の構築に係る支援等を行った。

平成 30 年 5 月 30 日（水） 総合的な学習の時間「みらいセミナー」参加
平成 30 年 6 月 8 日（金） 校内研修会
平成 30 年 7 月 27 日（金） 事業進捗に関する打ち合わせ
平成 30 年 10 月 17 日（水） 公民の授業に対する指導・助言
平成 30 年 11 月 5 日（月） 保健体育の授業に対する指導・助言

③ みえ基礎学力UPコンソーシアム

県事業「『学びの変革（第2期）』研究推進事業」の一環として、国語・数学・外国語（英語）の教員を集めた「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を組織し、推進校を協力校、サポート校と連携促進させるとともに、教科別グループ会議の円滑な運営、学習・指導方法の研究・開発を行った。

④ 研究成果発表会の開催

平成 31 年 2 月 1 日（金）に三重県総合文化センターで、県内高等学校 11 校から 39 名が参加した研究成果発表会を県内へ普及した。

4 研究の成果、作成した成果物

(1) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」の取組

県教育委員会が授業改善に取り組む国語・数学・外国語（英語）の教員を公募し、国語 3 校

3名、数学3校4名、外国語（英語）4校5名で「みえ基礎学力UPコンソーシアム」を組織した。教科別協議会を各教科で5回程度実施し、担当指導主事のもとで相互の授業見学と研究協議を行った。（※ 別添資料1「平成30年度「学びの变革」研究支援事業 実施報告書」参照）

（2）カリキュラム・マネジメントを促進する「学校マネジメントシステム」の研究・開発

県教育委員会が作成した「学校マネジメントシステム」を用いて、複数の学校で実践研究に取り組んだ。また、来年度から新学習指導要領の移行措置として先行実施されるカリキュラム・マネジメントの推進に向けて、「学校マネジメントシステム」の活用方法を2月に県内高等学校へ示した。

加えて、令和元年度から始まる「高校生のための学びの基礎診断」についても、学びの基礎診断への関わり方や、PDCAサイクルの構築に向けた支援策を12月に県内高等学校へ示した。

（3）学力向上推進協議会からの指導・助言

学力向上推進協議会を8月、10月、2月に計3回開催し、本事業のめざす方向性への意見や、授業改善に向けた指導・助言をいただいた。また、指導主事が、学力向上推進協議会と「みえ基礎学力UPコンソーシアム」内の各教員をつなぎ、各教員の取組状況や研究の成果がフィードバックされるような、双方向性のある助言に努めた。

第1回 平成30年8月29日（水） 県立桑名北高等学校

内容 本事業の趣旨及び計画について

第2回 平成30年10月19日（金） 県立桑名北高等学校

内容 国語・数学の研究授業への指導・助言及び効果的な指導方法について

第3回 平成31年2月15日（金） 県立桑名北高等学校

内容 「桑北スタンダード」の作成に向けて

（4）成果

① 株式会社ベネッセコーポレーションの「基礎力診断テスト」における、各生徒の学習到達ゾーンの推移

推進校の「基礎力診断テスト」における学習到達ゾーンの推移については、「（様式9）H30 委託業務報告書（推進校）」で記載したように、学年を追うごとに下位の成績層（Dゾーン）の生徒の数が減少するなど顕著な成果が現れており、来年度は推進校の指導方法等について、県内の高等学校へ広く普及していく予定である。

② 協力校である県立菰野高等学校が作成した「授業連携型基礎学力テスト（仮称）」を使った、推進校、協力校、サポート校での各生徒の成績の推移

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」で「授業連携型基礎学力テスト（仮称）」を作成した。来年度は、県内の高等学校へ広く普及し、各学校において基礎学力定着のための測定ツールとして活用し、さらに各校独自に改善を図っていく予定である。

③ 県内の全ての高等学校でカリキュラム・マネジメントに取り組むことができる、「学校マネジメントシステム」の開発（初年度）と各校での活用（2年目）の状況

今年度は推進校を中心にカリキュラム・マネジメントの実践研究を進めるとともに、本県がこれまで独自に進めてきた「学校マネジメントシステム」とカリキュラム・マネジメントの相互の関係について整理した。来年度からは、各学校でカリキュラム・マネジメントが推進されるように「学校マネジメントシステム」を活用することとし、その取組を「学校マネジメントシート」（※ 別添資料2参照）で進捗管理していくこととした。また、

このシートを使って好事例を収集し、先進事例を県内高等学校へ普及させていく予定である。

④ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」での各校の取組状況・生徒の変容アンケート調査
コンソーシアム内の各教員が授業において生徒の変容アンケート調査を実施した。「授業中寝る生徒がいなくなり、授業中発言する生徒も増えてきた。」「定期テストにおいて白紙の解答が減るとともに、一桁の点数を取る生徒が減った。」などの声が聞かれた。

⑤ 「高校生のための学びの基礎診断」の活用状況

2月に「高校生のための学びの基礎診断」をはじめ生徒の学力を測定するツールとして、来年度活用する予定のツールについて各学校へ調査した。また、今年度は各学校での基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの展開に向け、「基礎学力定着支援シート（仮称）」（※ 別添資料3参照）を作成した。来年度以降県内高等学校で活用するとともに、好事例の収集を図り、各学校へ普及させていく予定である。

5 課題とその分析

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」では、回を重ねるたびに熱心な討議が繰り返され、参加する教員も増え始めた。参加教員の授業では、グループワークやICTを使った取組は数多くみられるものの、「深く考える」授業への改善には未だ至らず、これまでの知識伝達型に重きを置いたものから変えることはまだまだ難しい状況にある。来年度は、「みえ基礎学力UPコンソーシアム」の取組をさらに進め、知識の伝達に重きを置いた授業からの脱却を、推進校の教員を核にしながらいきたい。

また、「高校生のための学びの基礎診断」の有効活用事例やコンソーシアムでの成果を普及し、各学校におけるカリキュラム・マネジメントを促進させることで、学校全体としての取組改善と各教科・科目での授業改善という大きい歯車と小さい歯車のそれぞれを組み合わせ、県全体として大きな変革を起こし、「オール三重で切り拓く、みえの基礎学力定着促進プロジェクト」を実現していきたい。

6 推進地域における研究成果等の今後の活用

「4(4)成果①～⑤」に記載したとおり、「学校マネジメントシステム」や「基礎学力定着支援シート（仮称）」を、来年度県内全ての高等学校で活用し、その中から好事例を収集し普及することで基礎学力の確実な定着につなげていく。また、「授業連携型基礎学力テスト（仮称）」についても県内の多くの高等学校で活用することで、さらに測定ツールとして各学校独自の深化を図っていきたい。

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」については、さらに参加校数の拡大と参加者数を増やすことで、各学校で核となる教員の育成に努めていく。

加えて、来年度は、研究成果をまとめた報告書を作成し、全ての県立高等学校等へ配付するとともに、令和2年2月には、本事業に係る研究成果発表会を実施し、その研究成果を県内高等学校へ普及する予定である。

7 その他

本事業に関連する関係資料を、別添資料1～3として提出します。

(様式 9)

平成30年度「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（学校）】

都道府県市名	三重県	学校名	三重県立桑名北高等学校
--------	-----	-----	-------------

1 推進校における学力に関する現状、生徒の実態

(1) 学校の概要

(i) 学校規模

学級数：19 学級 ・ 生徒数：663 名 ・ 教職員数：80（うち非常勤講師 18）名

(ii) 沿革（学力向上に係る経過）

本校は、昭和 55 年、三重県北部の桑名市に設立された全日制普通科高等学校であり、「地域に信頼される学校」を目指し、地域社会を支える生徒を育成する教育機関としての役割を担ってきた。平成 28 年度に、学力向上とキャリア教育の本格的な改革に着手し、生徒が落ち着いて授業を受けるようになったが、その際の転機となった大きな要因として、①義務教育範囲も含めた基礎学力を測る株式会社ベネッセコーポレーションの「基礎力診断テスト」を活用した学力の診断と定着を図る取組と、②3年間を通じたキャリア教育の体系化、再構築、の2点があった。現在は、この成果を授業改善と連動させながらいかに生徒の基礎学力の定着を図るかが課題である。

(2) 本校が平成 28 年度から取り組んだ学力定着に係る代表的な改革

(i) 「基礎力診断テスト」を活用した取組

基礎学力の定着と向上については、平成 28 年度までは、「基礎力診断テスト」を毎年 4 月に実施していたが、事前・事後指導や結果分析が十分に行われず、基礎学力の定着につながっていないという反省から、事前・事後の指導を十分に行う体制を整えるとともに、短期サイクルでの生徒の学力推移を把握し、指導改善にも生かせるよう、9月と1月にも新たに実施することとした。事前指導については、「基礎力診断テスト」実施の10日前から10分間の朝学習の時間を活用し、担任と副担任がチーム・ティーチングで指導を始めた。事後指導については、「基礎力診断テスト」で下位の成績層（D3）にある生徒を対象に、校長を除く全ての教員がそれぞれ2～3人の生徒を受け持ち、学習チューターとして個別に指導し始めた。加えて、生徒の「やればできる」という達成感や、前向きな思いを醸成するために、表彰制度も充実させ、クラスの成績上位層への表彰だけでなく、下位層を脱した生徒への「ジャンプ賞」や、担任や学年主任からの推薦の賞を設けて表彰するなど、多くの生徒が成功体験を得られるような仕組みづくりにも配慮した。

(ii) 3年間を通じたキャリア教育の体系化、再構築

グループワークを通してコミュニケーション能力やソーシャルスキルを身に付ける「総合的な学習の時間『みらい』」を展開してきた。学校として育てたい生徒像を「社会人として適切に意思疎通を図る力を身につける。」「主体的に学び続ける姿勢と力を養い、地域や社会に貢献する。」と定め、今年度、「キャリア教育委員会」を立ち上げ、高校3年間を見通したキャリア教育プログラムの構築を始め、3年間のキャリア教育を体系化、再構築した。この取組が評価され、今年度、文部科学省からキャリア教育に関する文部科学大臣表彰を受

賞した。

2 研究課題（平成 30 年度の重点課題）

本実践研究の研究課題を「オール三重で切り拓く、みえの基礎学力定着促進プロジェクト」とし、このうち本校では「基礎学力の確実な定着に向けた、学習・指導方法の開発及びP D C Aサイクルの構築」に取り組んだ。具体的には以下の3点について研究を進めた。

- (1) 基礎学力の確実な定着に向けた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善とその指導方法の開発
- (2) 「学びに向かう力」育成に向けた、教科横断的な視点からの学習方法の開発
- (3) カリキュラム・マネジメントの視点からの、基礎学力定着に向けたP D C Aサイクルの構築

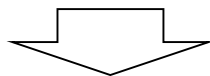
3 研究の具体的内容

(1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

以下のような組織体制で研究を推進した。

【図】 桑北スタンダード作成に向けた「学力の定着と推進に関する」関係組織について

総合的なカリキュラム・マネジメントの推進	キャリア教育委員会 企画（戦略）委員会	・総合的な学習の時間「みらい」（みらいセミナー等） ・コミュニケーション授業等本校の特色ある教育活動等		
「学びの基礎診断」につながる基礎力診断テストの進捗管理	学力向上委員会 (基礎力診断テストの事前・事後学習、表彰、D3学習会等進捗管理、授業改善)	・「みえ基礎学力UPコンソーシアム」（学力定着に課題を抱える複数の高等学校教科別グループ）への参画等		
「授業方法」の改善等の実働組織	授業力向上研究チーム 授業公開、授業研究の実施 カレッジクラス「探究」	・授業公開、研究授業、ベンチマーキング、校内研修等 ・総合的な探究の時間に向けた先行実施		
本事業への有識者による指導・助言	学力向上推進協議会 （本事業への有識者による指導・助言）			
	名 前	所 属	役職	役 割
	赤沢 早人	奈良教育大学次世代教員養成センター	教授	カリキュラム・マネジメントへの助言
	岩崎 恭典	四日市大学	学長	事業全体の検証・評価
	鈴木 建生	ユマニテク短期大学	副学長	授業改善への指導・助言
	徳岡 卓也	(株)ベネッセコーポレーション名古屋支社	支社長	基礎学力の定着へ向けた実践事例の紹介



『桑北スタンダード』の作成・実施

(2) 推進地域（教育委員会等）との連携

(i) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への参加

県教育委員会が主催する「みえ基礎学力UPコンソーシアム」に、本校の国語・数学・英語の教員が参加し、本校が目指す「桑北スタンダード」作成に向けた学習・指導方法の実践、改善に取り組んだ。

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」では、本校が基礎学力の確実な定着に向け開発した学習・指導方法を、協力校、サポート校が、それぞれの学校でその実践に取り組むことで、学習・指導方法の改善を進め汎用性の高いものとした。

(ii) 教育委員会からの指導・助言

本事業を推進するにあたり、県教育委員会との連携を密にとりながら、指導主事による学校訪問やベンチマーキング等の外部機関との連携の構築に係る支援を受けた。

(3) 学力向上に向けた具体的な取組 【平成30年度の取組】

(i) 基礎学力の確実な定着に向けた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善とその指導方法の開発

① 教員の授業力の向上

ア 「桑北スタンダード」の開発

○ 各教科から10名の教員で「授業力向上研究チーム」を組織し、外部からの参加者を含めた授業公開及び研究協議会を月1回程度実施し、授業者及び参加者からの振り返りをもとに、授業改善を進めた。（別冊資料集P19～48参照）

○ 「授業力向上研究チーム」が中心となり、主体的・対話的で深い学び等の実践事例を集約した「桑北スタンダード」を作成している。スタンダードでは、学力向上推進委員会からの専門的な指導・助言のもと、主体的・対話的で深い学びに向けた指導方法の標準化をめざしている。（別冊資料集P3～5参照）

・ 学力向上推進協議会の実施状況

第1回 8月29日(水) 本校

第2回 10月19日(金) 本校（授業見学とその後の研究協議も合わせて実施）

第3回 2月15日(金) 本校

イ 主体的・対話的で深い学びの推進に係る研修会等

○ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習・指導方法、評価方法の研修会を、以下のとおり実施した。

・ 研修会の実施状況

6月8日(金) リクルートマーケティングパートナーズ 角田浩子様 講演 本校

10月22日(月) 文部科学省初等中等教育局 清原洋一主任視学官 講演会 本校

12月13日(木) ユマニテク短期大学 鈴木建生副学長 授業力向上研修会 本校

(別冊資料集P10～18参照)

○ 他校の先進事例等から学び、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習方法・指導方法を校内へ普及するため、以下のベンチマーキング等を実施した。また、文部科学省の主任視学官、調査官等から主体的・対話的で深い学びの推進に係る指導・助言をいただきながら改善に努めた。

・ ベンチマーキング等の実施状況

11月12日(月) 立命館宇治高等学校 数学科授業見学

11月23日(金) 東京学芸大学附属高等学校 第17回公開教育研究大会参加

1月31日(木) 福井県立若狭高等学校 国語科授業見学

2月 1日(金) 石川県立松任高等学校 学校訪問

2月 16日(土) 広島大学 研究拠点フォーラム(国際バカロレア)参加

2月 4日(月) 埼玉県立鳩ヶ谷高等学校 学校訪問

- ・ 文部科学省主任視学官等による学校視察等の実施状況

10月 22日(月) 文部科学省視学官・調査官来校 授業研究・講演会 本校

(別冊資料集P6～8参照)

2月 25日(月) 文部科学省ヒアリング(本校教員2名が参加) 文部科学省

ウ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への参加

- 県教育委員会が主催する学力定着に課題を抱える高等学校の国語・数学・外国語(英語)の教員を集めた「みえ基礎学力UPコンソーシアム」に本校の教員が参加し、学習・指導方法の実践、改善に取り組んだ。

- ・ みえ基礎学力UPコンソーシアムへの参加状況

【国語科】

第1回 6月 15日(金) 菰野高校 第2回 8月 29日(水) 菰野高校

第3回 9月 25日(火) 伊勢工業高校 第4回 1月 15日(火) 本校

第5回 2月 1日(金) 三重県総合文化センター(欠席)

【数学科】

第1回 6月 15日(金) 菰野高校 第2回 9月 7日(金) 四日市四郷高校

第3回 10月 26日(金) 本校 第4回 1月 15日(火) 菰野高校

第5回 2月 1日(金) 三重県総合文化センター

【英語科】

第1回 6月 15日(金) 菰野高校

第2回 11月 1日(木) 四日市四郷高校(欠席)

第3回 1月 25日(金) 松阪商業高校

第4回 2月 1日(金) 三重県総合文化センター

※ この他に8月 29日(水)に本校で学力向上推進協議会のメンバーと指導主事との協議を実施

② 思考力・判断力・表現力等を向上させる取組の開発と蓄積

- 知識・技能の習得をさらに強固なものとし、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」を育むための授業での発問や指導方法、また、試験問題等の作成を通じた評価方法の確立を、「学力向上委員会」を中心に取り組んだ。

- ・ 学力向上委員会の実施状況

第1回 6月 21日(水) 本校 第2回 9月 28日(金) 本校

第3回 10月 19日(金) 本校 第4回 1月 18日(金) 本校

- 生徒に育みたい資質・能力の1つである「読解力、表現力」について、生徒一人ひとりが授業に参加し、自分の考えや思いを周りの生徒や教員に伝えることができるなど、各教科・科目における言語活動を充実させるとともに、その他の教育活動においても「読解力、表現力」を育む言語活動に取り組んだ。

(ii) 「学びに向かう力」育成に向けた、教科横断的な視点からの学習方法の開発

① 家庭学習につながる生徒の主体的な学習方法の研究

- 家庭学習を定着させる仕組みを「授業力向上研究チーム」で検討してきた。家庭学習の習慣づけは容易ではないが、生徒は好きなことには苦を感じることなく取り組むことか

ら、そのことを活かした学習のきっかけを作る工夫を模索している。

② 総合的な「探究」の時間の開発

- 総合的な学習の時間「みらい」の取組の中で、探究的な学習を深化させる取組「探究」を新たに開発してきた。キャリア教育に軸をおいた探究課題を設定し、自ら課題を見つけ地域の課題やSDGs等国際社会の課題と連動させるなどの教科横断的な視点から、新たな総合的な探究の時間「みらい」の開発に取り組んだ。

(iii)カリキュラム・マネジメントの視点からの基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築

① カリキュラム・マネジメントの実践

- 「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、県教育委員会が推進する「学校マネジメントシステム」を使って、カリキュラム・マネジメントの実践・検証・改善に取り組んだ。
- 目指す学校像、生徒に身に付けたい資質・能力を整理し、その実現に向けたPDCAサイクルを構築するとともに、資質・能力を踏まえた教科横断的な視点からの改善や、学校関係者評価委員会等の外部の資源の活用を踏まえたものとしていくよう取組を進めた。特に、「学校マネジメントシステム」における「学校マネジメントシート」では、他校では学年や校務分掌の年間目標と進捗状況の管理となっているが、これに加え、教科での目標を明記して、学力向上のための取組の進捗管理を始めた。

② 基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築

- キャリア教育プログラム策定の際に全校体制で取り組んだ経験を踏まえ、基礎学力定着に向けたPDCAサイクルを、『オール桑北』として構築してきた。
- その1つとして、入学時から「基礎力診断テスト」を活用した基礎学力向上に向けた取組を進めてきた。具体的には、以下の取組を行った。（別添資料4参照）
 - ・ 「基礎力診断テスト」への事前学習及び「基礎力診断テスト」の結果分析
 - ・ OneWeekトライアル等、成績下位層に向けた「D3学習会」の実施
 - ・ 「D3学習会」に向けた対象生徒への講話、D3マンツーマン指導、各学年での「朝学」における基礎力診断テスト事前・事後の取組
 - ・ 成績上位者、上昇者への生徒表彰（クラス最高得点賞・学年主任賞・教科トップ賞・ジャンプ賞・みらい賞）

(4) 検証の手立て

今年度は、以下の点について検証を進めた。この他に申請時に立てた検証の手立てについては、次年度以降に検証を進めていくこととしている。

- ① 「基礎力診断テスト」における、生徒の学習到達ゾーンの推移
- ② 主体的・対話的で深い学びの推進に係る研修会での教員対象のアンケート結果での自己評価の状況
- ③ 校内における生徒・保護者対象の授業アンケートの満足度の状況
- ④ 「桑北スタンダード」の開発
- ⑤ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」への本校教員の取組状況及び生徒の変容アンケートの結果
- ⑥ 生徒の学習状況に関するアンケートでの家庭学習の取組状況の推移
- ⑦ 基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築
- ⑧ 学力向上推進協議会からの評価

4 研究の成果、生徒の変容

前述の「3（4）検証の手立て」にあげた各項目については、以下のような成果や変容が見られた。

- ① 別添資料4に示したように、「基礎力診断テスト」における生徒の学習到達ゾーンの推移については、低学力層の減少等顕著な成果が現れている。「D3学習会」やテスト前後の事前・事後指導の進捗管理を行う学力向上委員会も軌道に乗ってきており、生徒個々への丁寧な指導が有効であることが立証されたと考えている。
- ② 「3（3）(i)①主体的・対話的で深い学びの推進に係る研修会等」に記載した各研修会へ参加した教員のアンケート調査では、多くの教員がこれまでの指導方法から、主体的・対話的で深い学びの推進に向けた指導方法への改善の必要性を感じている。一方で、従来の授業を変えることへの不安を抱えている教員も一定数いることが分かった。
- ③ 生徒に行ったアンケートでは、「中学校の授業と比べて、高校の授業について学びやすいと思いますか？」という問いに、「かなりそう思う」が19%、「そう思う」が62%、「あまりそう思わない」が13%、「そう思わない」が6%であった。また、保護者に行ったアンケートでは、「お子さんは授業がよくわかると感じていると思いますか？」という問いに、「かなりそう思う」が7%、「そう思う」が62%、「あまりそう思わない」が30%、「そう思わない」が1%という結果であった。アンケート調査の結果、多くの生徒や保護者は授業へ満足している状況が見られ、授業改善に向けた取組が有効であったことが伺える一方で、満足できていない生徒が多くいる授業も一定数あることが分かった。
- ④ 「授業力向上研究チーム」が中心となり、相互に授業を公開し校内における優れた授業実践を共有する機運が醸成されつつあり、全職員が授業研究用ボードを持参したり、授業研究の際の成果物を職員室横の印刷室に掲示したりするなど、授業公開・授業改善への積極的な取組が見られるようになってきた。来年度にまとめる「桑北スタンダード」については、学力向上推進協議会の委員から、単なる教師側のマニュアルではなく、生徒の視点に立ったスタンダードとするよう助言を受けた。
- ⑤ 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」へ参加した教員にとって、1年間の活動や取組は充実したものになったようで、校内でその他の教員を牽引する役割を担う教員も現れた。また、授業において実施した生徒の変容アンケートによると、「授業中寝る生徒がいなくなり、授業中発言する生徒も増えてきた。」「定期テストにおいて白紙の解答が減り、一桁の点数を取る生徒が減った。」などの声が聞かれた。
- ⑥ 生徒の学習状況に関するアンケートの結果では、家庭学習の取組状況について、「宿題や課題以外にも学習する」と回答した生徒が、学年ごとに徐々に増えてきており、改善の傾向が見られてきた。
- ⑦ 「基礎力診断テスト」における生徒の学習到達ゾーンの推移については、低学力層の減少等顕著な成果が表れていることから、「3（3）(iii)②基礎学力定着に向けたPDCAサイクルの構築」に記載のとおり、基礎学力定着に向けたPDCAサイクルが構築されてきたと考えている。
- ⑧ 学力向上推進協議会の委員からは、一人ひとりの生徒に応じた指導が実現されていることや、授業改善に向け積極的な姿勢が教員に見られることなどから、事業の方向性については概ね評価をいただいている。

5 課題とその分析

（1）「基礎力診断テスト」と授業での学力向上の連動

「高校生の学びの基礎診断」に向けて、これまでの「基礎力診断テスト」を活用した取組の成果から、低学力層の減少等顕著な成果が現れてきた一方で、日々の授業の中でいかに学力向上を図っていくかが課題と認識している。今後は、授業力向上委員会のメンバーによる授業の拡大・充実に加え、授業を変えることへの不安を抱えている教員の意識の変容を図るよう、「みえ基礎学力UPコンソーシアム」に参加している教員を核とした学校全体での組織的な授業改善の取組を進めていく必要がある。

(2) 「みえ基礎学力UPコンソーシアム」における他教科への広がり

「みえ基礎学力UPコンソーシアム」での取組が本校の授業改善に良い影響を与えた一方で、今年度は募集が3教科（国語・数学・外国語）に限られていたことから、本校においても教員への広がりが一部にとどまってしまった印象がある。次年度は、管理機関と相談しながらその他の教科にも各取組を広めるよう検討していく必要がある。

(3) 家庭学習定着に向けた取組の推進

生徒の家庭学習への姿勢は一定の改善傾向が見られつつあるものの、習慣づけたものとはなっていない様子も見受けられる。家庭学習の定着に向けた新たな取組を進めていく必要がある。

(4) 文部科学省でのヒアリングから認識した課題

2月に文部科学省で行われたヒアリングでは、多くの課題を新たに認識することができた。以下の主な内容について今後整理し、次年度に向けて検討していく必要がある。

- 生徒の競争心を煽るのではなく、その生徒なりのペースで勉強できる環境を整える必要がある。
- 学んだことを実社会で活用していかなければならない。活用しなければ知識として残らないので、何をどのような場面で使うか、ある程度教員が示していく必要がある。例えば国語・数学・英語で学んだことを「総合的な探究の時間」に繋げるなど、実生活との結び付きと「使う」ことを意識する必要がある。
- 依然として、知識伝達型の授業を行う教員が高校には多く、そのような教員には、なぜ授業を変える必要があるのか分からない教員や、どのように変えたら良いかが分からない教員もいる。授業改善の1つとして自分の授業を振り返るための「授業記録」をとることも有効な手段である。
- 高校の授業は評価することが圧倒的に弱い。PDCAサイクルの中ではD（実行）が大切だと言われるが、C（評価）も非常に大切であり、生徒がどれだけ取り組めたかという個人内評価を充実させることが有効である。

6 今後の取組（予定）

1年間の研究実践活動により、教職員がお互いに授業研究を日常的に行う機運が高まった。今年度の学力向上推進協議会の委員や文部科学省からの助言も活かして、以下のことに注力しながら来年度の取組を進めていきたい。

- 教員のマニュアルではなく、生徒からの目線で作られた、汎用性のある「桑北スタンダード」を作成
- 国語・数学・外国語以外の教科への授業改善の展開と、組織的・継続的な授業改善
- 「高校生のための学びの基礎診断」につながる「基礎力診断テスト」への取組の改善と、授業・家庭学習との連動及びPDCAサイクルの確立
- 改善すべきテーマを設定した授業公開・授業研究の実施と、より実践的な授業改善に向けた研修会の実施
- 「授業記録」の作成と活用、教科での学びを「使う」意識での教育活動の充実

- SDGs等、地域・社会の課題と自らの課題をつなぐ総合的な探究の時間「みらい」の創設
- 客観的なエビデンスに基づいた成果の検証と学校マネジメントシートの活用等研究内容の県内他校・全国への普及

7 その他

本事業で使用した関係資料を、別冊資料及び別添資料4として別途提出します。